



# 月報

No. 441  
2017年  
2月

日本キリスト教団  
茅ヶ崎香川教会  
茅ヶ崎市香川1丁目 34-35  
<http://kagawachurch.jimdo.com/>

## 説教 『 真実な方を知る力が与えられた 』

小河信一 牧師

ヨハネの手紙 一 5章13節～21節

13 神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです。14 何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。15 わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるといことが分かるなら、神に願ったことは既にかなえられていることも分かります。

16 死に至らない罪を犯している兄弟を見たら、その人のために神に願いなさい。そうすれば、神はその人に命をお与えになります。これは、死に至らない罪を犯している人々の場合です。死に至る罪があります。これについては、神に願うようには言いません。17 不義はすべて罪です。しかし、死に至らない罪もあります。

18 わたしたちは知っています。すべて神から生まれた者は罪を犯しません。神からお生まれになった方が、その人を守ってくださり、悪い者は手を触れることができません。19 わたしたちは知っています。わたしたちは神に属する者ですが、この世全体が悪い者の支配下にあるのです。20 わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエス・キ

リストの内にいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です。<sup>21</sup> 子たちよ、偶像を避けなさい。

本日は、ヨハネの手紙 一 の結びを読みます。ヨハネの手紙 一 5:13-21 は、:13-15 執筆の動機、:16-17 とりなしの祈り、:18-21 確信と勧めから構成されています。今、それらを再構成して、次の三つの要点に従って説き明かしていきましょう。

### ①隣人愛

ヨハネの手紙 一 において繰り返されてきた主題 (2:10、3:11、4:7 他) を別の角度から……別の言葉で……再現しています。新鮮な語り口によって、「互いに愛し合いなさい」ということが、読み手の心にすっと納められるようになっています。

### ②永遠の命

これは、キリストにおいて今すでに起こっていることですが、基本的に、これからのこと、将来に関わることなので、手紙の終わりで語るにふさわしいものです。「永遠の命」が鍵語として 5:13 と:20 とに枠付けられています。正統な信仰は常に、まことの希望を告げ広めます。

### ③5:20 と:21

父なる神とキリストの為されたこと、すなわち、先行する神の御業・恵みと、信仰者の応答が簡潔に提示されています。

偶像崇拜との戦いは、主イエスが先陣を切り (マルコ 1:12-13)、勝利を成し遂げてくださいましたが、私たちも信仰を盾としてその戦いに連なることが求められています。

5:20 は十戒の第 1 戒、また:21 は十戒の第 2 戒に相当します。信仰そのものとその信仰を保つべき実践が配置されています。古くて新しい御言葉が読み手に送り届けられます。

いったい、手紙の終わりにどのようなことが書かれているのか、その点に心を留めたいと思います。これまで手紙の著者が書いてきたことに対して、この結びは適確な内容になっているのでしょうか？

結論から言えば、この結びでは、手紙全体とつながりを保ちながら、筆が擱かれています。そのみごとにつながりと終結は、何よりもこの手紙がただひたすら聖霊の導きによって綴られている証しでありましょう。

まず、教会の人々に向かって、「互いに愛し合いなさい」と、①隣人愛について語っていることを取り上げます。

ヨハネの手紙 — 5:16—

死に至らない罪を犯している兄弟を見たら、その人のために神に願いなさい。

肉の親族よりも広い概念である「兄弟」のために、すなわち、神の愛のもとに交わりを持っている「兄弟」のために、神に願いなさい・祈りなさい、と勧められています。

私たちはしばしば、「罪を犯している」人を見れば、叱りつけたり裁いたりして、結局、その人を遠ざけたりします。ヨハネはそうではなく、その人を兄弟として受け入れ、神に向かってとりなすことが大切だと考えています。これこそ、兄弟愛の原点にほかなりません。祈りによって兄弟を愛し通すという善き証しは、私たちが「互いに愛し合う」ことに向けて前進させます。

神に願うこと、すなわち、神にささげる祈りについて、実は、その前段であるヨハネの手紙 — 5:13-15 に説き明かされています。言い換えれば、**祈りの勧め**が、5:16において、**兄弟愛の勧め**と合流したということです。

著者ヨハネは、ヨハネの手紙 — 5:13-15 を読んだ信仰者が、自分のためにのみならず、兄弟姉妹のために祈ることを願っているのでしょう。この著者の静かで熱い思いは、手紙最後の慰め深い言葉として、兄弟愛への最適のうながしになっているのではないのでしょうか。

ヨハネの手紙 — 5:14-15—

<sup>14</sup> 何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願うなら、神は聞き入れてくださる。これが神に対するわたしたちの確信です。<sup>15</sup> わたしたちは、願い事は何でも聞き入れてくださるということが分かるなら、神に願ったことは既<sup>すで</sup>にかなえられていることも分かります。

「神に願ったことは既<sup>すで</sup>にかなえられている」は、ラザロを生き返らせる前に、主イエスが言われた「父よ、わたしの願いを聞き入れてくださって感謝します」（ヨハネ福音書 11:41）を思い起こさせます。腐臭の漂う墓穴からラザロを生き返らせてくださった父なる神、御子をさえ惜<sup>お</sup>しまわずに死に渡し、私たちに永遠の命を与えてくださった父なる神は、私たちの祈りを必ず聞き届けてくださるといことです。

ところで、ヨハネは一方で「何事でも神の御心に適うことをわたしたちが願う」と言うと共に他方で「これについては、神に願うようにとは言いません」（Ⅰヨハネ5:16）と述べています。具体的には、「死に至る罪」を犯している人については、神にとりなすことはない、ということです。

「何事でも」と、主にある自由が宣言される中で、私たちの祈りの限界を越えた願いがあるのだと、教えています。

それでは、「死に至らない罪」と「死に至る罪」とは、どのように区別すればよいのでしょうか。そこで、神に祈り、とりなすことを禁じられた例として、本日の旧約聖書箇所を掲げました。

エレミヤ書14:11-12——

11 主はわたしに言われた。「この民のために祈り、幸いを求めてはならない。12 彼らが断食しても、わたしは彼らの叫びを聞かない。彼らが焼き尽くす献げ物や穀物の献げ物をささげても、わたしは喜ばない。わたしは剣と、飢饉と、疫病によって、彼らを滅ぼし尽くす。」

この神の禁止の言葉は、神と民との間の仲保者たることを重い使命として受け止めていた預言者エレミヤには、さぞや意外だったでしょう。「この民」の中のすべての人が「死に至る罪」を犯していたのでしょうか。

ここで言えることは、苦難の今の時、神の裁きが下る、それを見極めることが、エレミヤの専心すべき務めであったということです。「死に至る罪」を犯している人を目の前にして、エレミヤの苦悩は深まっていきました。「主の名を口にすまい もうその名によって語るまい、と思っても 主の言葉は、わたしの心の中 骨の中に閉じ込められて 火のように燃え上がります」（エレミヤ書20:9）との告白がそのことを物語っています。その熱情を抑制しつつ、神の僕たる者は、いかなる時でも、神の教えを越えるのではなく、神の教えにとどまらねばなりません（参照：Ⅱヨハネ:9）。

教義的には、死に至る罪を犯している人というのは、いったんキリストの教えを受け入れながらも、それを捨ててしまったり、それに敵対している人を指します。カルヴァンは「人間が神からまったく離れてしまうときの、背教・反逆のことである」と説き明かしています。

ただし、ささいな罪とキリストに真<sup>ま</sup>っ向<sup>こう</sup>から背<sup>そむ</sup>く罪とを、自分は区別し見極められると思い上がるのは間違いです。サタンは、ささいな罪から人を惑わし、反キリストをつくり出そうとしています。私たちが聖霊の導き

のままに祈るといふ、その聖霊なる神は、私たちに自由の霊を与える（詩編 51:14）と共に、今私たちが為したり語ったりすることについて、時にそれを禁じると告げられます（使徒言行録 16:6）。

次に、②「永遠の命」の二つの節を読みましょう。

ヨハネの手紙 一 5:13——

神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです。

ヨハネの手紙 一 5:20——

わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です。

ヨハネの手紙 一 では、「永遠の命」という言葉自体は手紙の最初から出ており、反復されてきました（1:2、2:25、3:15、5:11）。

この説教の冒頭の解説で、「永遠の命は……手紙の終わりで語るにふさわしいものです」と言いましたが、その論拠は皆さんのよく知っておられる文書に在ります。

使徒信条——

我は聖霊を信ず、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、  
からだのよみがえり、永遠とこしえの生命いのちを信ず。アーメン。

重要な語句が連続している使徒信条の最後に、「永遠の命」が配置されています。なぜ、そこに「永遠の命」が記されたのでしょうか？ 符合するかのよう、ヨハネの手紙 一 においても結びとも後からの付加（なおさらその意図は？）とも言われる箇所、に「永遠の命」があらわされている、その訳は何なのでしょう？

引用文の前者、ヨハネの手紙 一 5:13 には、「これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいから」というように、信仰者の確信を呼び覚ます強いメッセージが表出されています。

ヨハネは、信仰者は「永遠の命を得ている」のだと言いますが、実際、私たちはどのように「永遠の命」をとらえているのでしょうか。どうしたら、私たちはいつも永遠の命をわきまえ知っておくことができるのでしょうか。

それで参考になるのが、ハイデルベルク信仰問答の問い 58 「永遠の生命こゝろの項は、どんな慰めを、与えますか」です。この信仰問答の答えには、

どういふものとして、「永遠の命」を信じるのか、少し意外な点が含まれているように、私には思えます。

問い58の答え――

私が、今すでに、心の中に、永遠の喜びの初めを受けていますように、この生命の終わった後にも、人の目もいまだ見ず、人の耳もいまだ聞かず、誰の心にも、今まで浮かんだことのない、完全な祝福を持ち、そのうちにあつて、神を、永遠に、讃美するようになることでもあります。

この答えには、「永遠の命」そのもの以上に、それに向き合うべき、ヨハネの言葉で言えば、それを得ていることを悟っている人の心の内側・姿勢が描かれています。注目すべきは、「人の目もいまだ見ず、人の耳もいまだ聞かず、誰の心にも、今まで浮かんだことのない」との注意喚起です。

新約聖書に、永遠の命を持つことを許された人々の生活が若干は描かれています（天の国の祝宴や新しい都エルサレムなど）。しかし、私たちは誰も、「完全な祝福」なる永遠の命の全容を知っているわけではありません。ユーモアを込めて言えば、天国から帰って来た人の話を聞いた人はいません。

もちろん、ヨハネが「永遠の命を得ていることを悟らせたいから」と願ったのは、誤りではありません。問い58の答えの中に、「今すでに、心の中に、永遠の喜びの初めを受けています」とある通り、私たちは、永遠の命の初め・前味を、主イエスを通して知らされています。主イエス・キリストが死にて葬られ、三日後によみがえられたことが、私たちはすでに「永遠の命を得ている」基盤です。

ハイデルベルク信仰問答が教えているように、「永遠の命」、それそのものがどんなものであるについては留保しなさい、ということです。聖書の中にそれほど具体的書いてはいないのでから……。信仰問答は、それよりも、「永遠の喜びの初め」という喜びをもって、「アーメン、ハレルヤ」（ヨハネ黙示録 19:4）と声を合わせ、神を讃美し続けること、それが「永遠の命」に生きることであると、私たちに教えています。

著者ヨハネは、手紙を読み終わった教会の人々が、すでに永遠の命を得ていることを知らされ、それを心に納め、これからずっと永遠の命を宝として歩んで行くようにと願っています。

ヨハネの手紙 ― 5:20-21――

20 わたしたちは知っています。神の子が来て、真実な方を知る力を与えてくださいました。わたしたちは真実な方の内に、その御子イエス・キリストの内にいるのです。この方こそ、真実の神、永遠の命です。21 子たちよ、偶像を避けなさい。

手紙の末尾に、ヨハネは信仰者として生きるに際して、最も大切な二つのことを順序立てて語っています。

一つは「神の子、イエス・キリストが来て、真実な方、父なる神を知る力を与えてくださいました」ということです。主の十字架と復活に対する信仰に基づいて、私たちは神を知り、神と交わるといふ恵みにあずかっています。その信仰も、「神の子が来て」、親しく私たちに教え、御業と御言葉をもって、私たちが信じられるように、神の子が導いてくださったものです。神の選びと愛において、神の側から私たちに信仰とそれに<sup>よ</sup>拠る知識が与えられた、それが第一のことです。神が私たちに為してくださったことを、ただただ受け止めるように、ということ。一言でいえば、すべて、神にゆだねなさい、ということ。

それから、もう一つ、第二のこととして、ヨハネは「子たちよ、偶像を避けなさい」と、命じています。

「偶像を避けなさい」というのは、少し唐突な事のようにも聞こえますが、そうでしょうか。5:20 から:21 へという展開は滑らかであり、なおかつ、手紙の締めくくりとして簡にして要を得ています

すでに解説したように、5:20 は十戒の第1戒「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」、また:21 は十戒の第2戒「あなたはいかなる像も造つてはならない」に相当します。5:20 の、真実の神を、神から与えられた力によって信じること、そして、:21 の、その真実の神以外のものに依り頼まないことは、そのまま十戒の第1戒と第2戒とに並行しています。

ヨハネの手紙 一 は全章を通じて、反キリストなど異端による偽りの信仰(2:22、4:5,20 他)に気をつけるように警告してきましたので、その点からも「偶像を避けなさい」との再確認は的確です。

私たちが神の憐れみに対し、感謝・応答として第一に努めるべきことは、偶像を<sup>ほま</sup>拝まない、言い換えれば、自己中心の主張や世の誉れなどを祭り上げないということです。

今日、愛する兄弟姉妹と共に、ヨハネの手紙 一 を読み通すことができましたことを、主なる神に心より感謝します。私たち自身が、福音を知らせる手紙となって、「イエスがメシアであること」と「互いに愛し合うこと」をこの世の中に伝えられますようにと祈ります。

茅ヶ崎香川教会月報

No. 441

2017年2月26日発行

編集発行：日本キリスト教団

茅ヶ崎香川教会

発行責任者：小河信一

編集責任者：鈴木隆二